

スピーキング力を伸ばしている学校は どんな学校か？ —GTEC 4技能のスコア分析から—

根岸 雅史(関東、東京外国語大学)

加藤 由美子(ベネッセ教育総合研究所)

森下 みゆき(ベネッセ教育総合研究所)

鹿島田 優子(株式会社ベネッセコーポレーション)

授業評価の難しさ

- 1回の研究授業で英語教育の評価ができるか
- 研究授業の評価は実証的であるか
- 学校英語教育の成否を1回の研究授業で判断していいか

研究設問

- 日本の高等学校英語教育において、どの程度英語スピーキング力が伸びているのか。
- その程度は学校ごとにどの程度異なるのか。
- スピーキング力を伸ばしている学校にはどのような特徴があるのか。

先行研究

- アルク英語教育実態レポート Vol.9 [2017 年4月]
- 日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査 II
ー調査2年目にスピーキング能力が向上した学校の特徴とその背景ー

■高校1年次からのスピーキング能力の変化

1. 調査協力校3校のうち、公立 B 高校で、高校1年次からのスピーキング能力の伸びが著しい3年間追跡調査における2年目の結果(スピーキングテスト TSST=Telephone Standard Speaking Test で測定)は、調査協力校3校のうち公立 B 高校で、2015年度に実施した高校1年次の調査から TSSTレベルが1以上上がった生徒が 41.9%。他の2校(私立 A 高校:21.9%、公立 C 高校:18.8%)に比べて20ポイント以上高く、スピーキング力の伸びが著しい。

日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査 II

スピーキング能力が大きく向上した学校の特徴

主に知識の習得や定着を目的とする活動

- ・単語・フレーズ等の発音練習
- ・教科書本文やキーセンテンスの暗記
- ・教科書本文の音読

主に英文を作って発信することを目的とする活動

- ・会話・ディスカッション
- ・先生の質問に答える
- ・スピーチ・プレゼンテーション
- ・スキットなどのロールプレイ

研究手法

英語力の指標としてGTECのスコアを用いて、英語のスピーキング力の伸長の著しい学校を特定し、それらの学校の英語教育のあり方を分析することで、英語のスピーキング力の伸びの要因を探る。

スコアの分析＋質的調査（質問紙＋インタビュー）

調査対象校

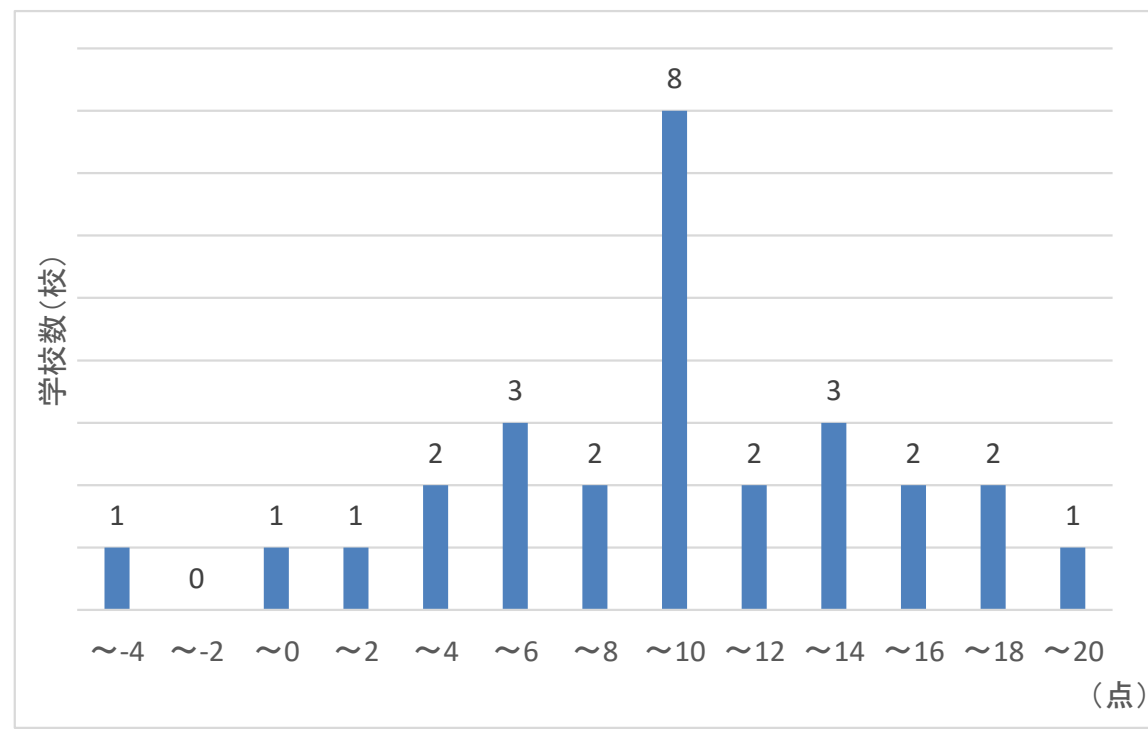
- GTECスピーキングテストを学校単位で、受検した高等学校のうち、1年時(2015年冬)と2年時(2016年冬)において受検している学校を調査対象校とする。
- なお、本調査では、小規模校の学校については対象外とし、受検者数50人以上の学校を今回の対象とした。
- さらに、なるべく公平な条件での比較を行うために、1)受検人数の増減が10%以内、2)学習日数が1年間±70日以内という条件で、学校を絞り込んだ。その結果、28校を抽出した。
- そのうち、21校が、同期間にGTECリーディング、リスニング、ライティングテストを受検しており、4技能での分析が可能。

結果(1):スピーキングスコアの伸びの実態

- スピーキングスコアを1年間で、20点近く伸ばしている学校がある一方で、得点の上昇のほとんどない学校もある。

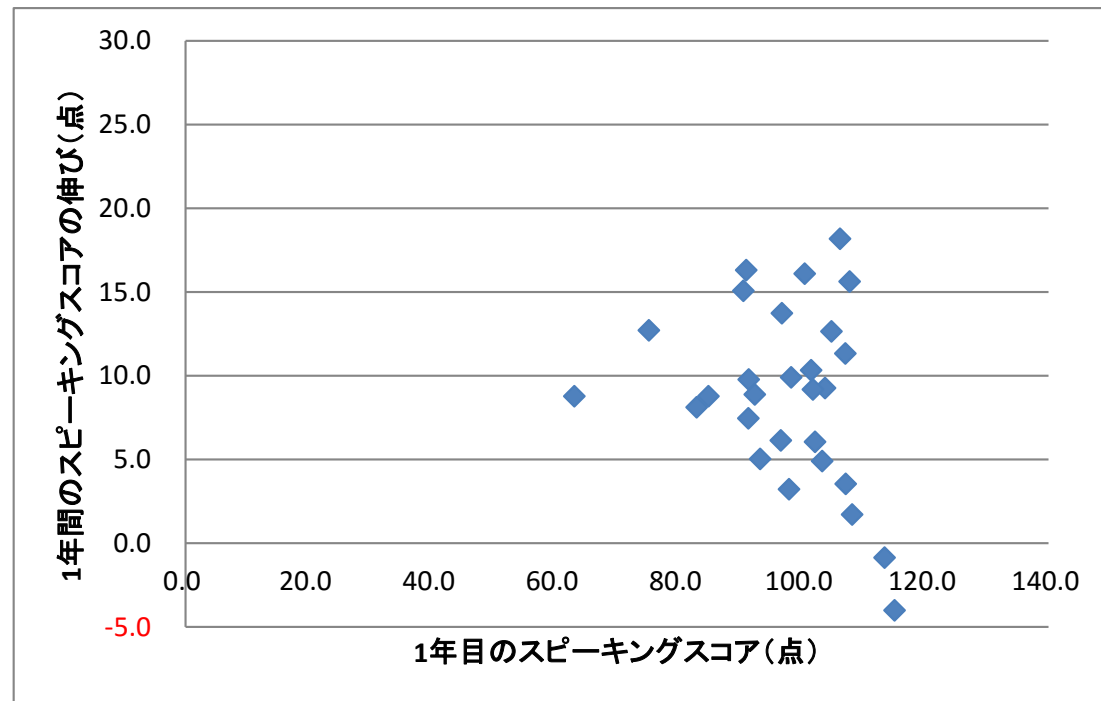
(調査対象校がスピーキングテスト受検時2015年度、2016年度のスピーキングテストの上限値は170点)

1年間のスピーキング・スコアの伸びの分布



結果(2): 出発点による伸びの違い

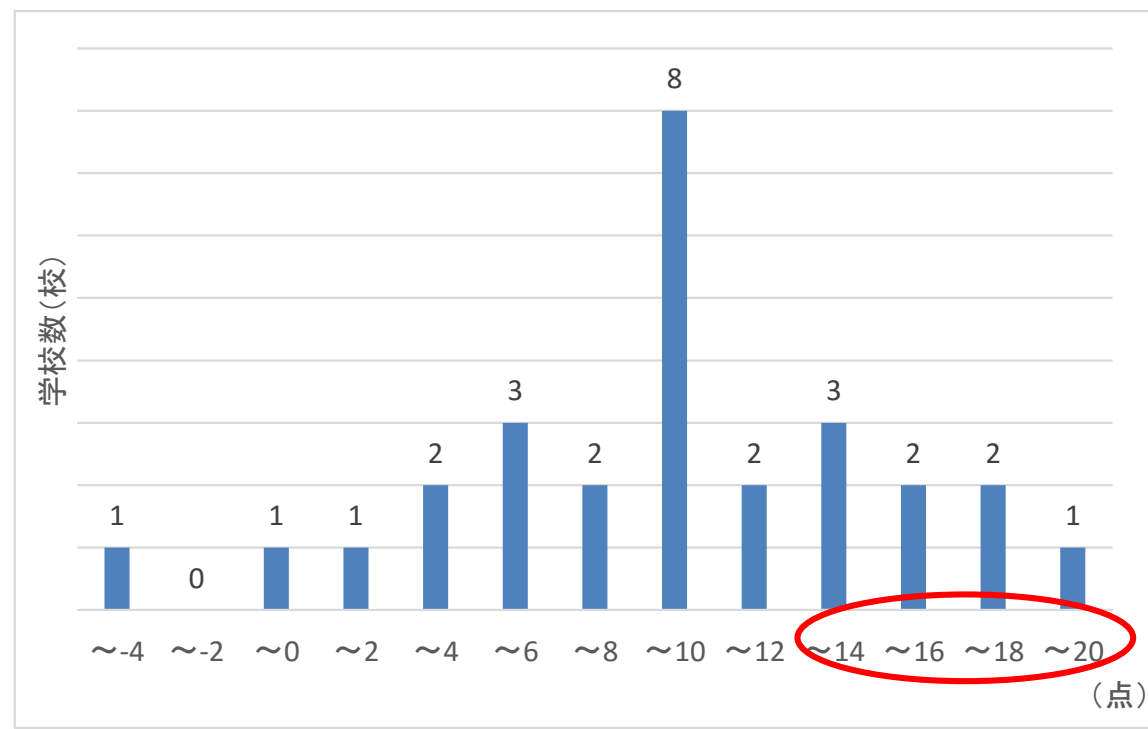
- ・出発点が異なっても、それぞれにスコアを伸ばしている学校とそうでない学校がある
- ・初回のスピーキング・テスト・スコアが100点前後でも、20点近くまで伸びている学校がある一方で、伸びがマイナスの学校があるという具合で、開きはかなり大きい。



結果(3):スピーキングスコアの伸びている学校の抽出

- スピーキングスコアの伸びの平均は8.8点。
- スピーキングが12点以上伸びた学校から、4技能で結果がみられる学校を抽出。

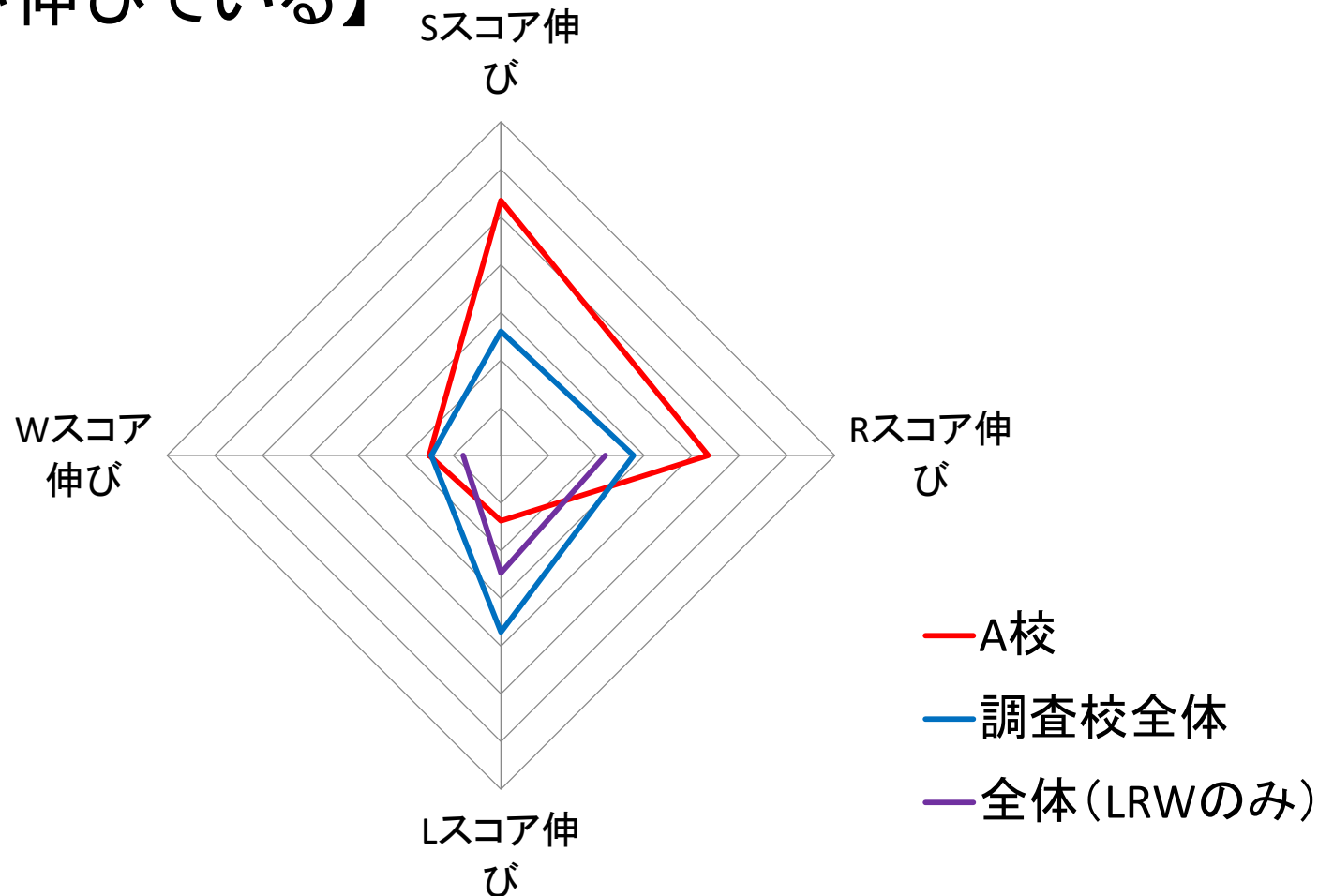
1年間のスピーキング・スコアの伸びの分布



結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

A校

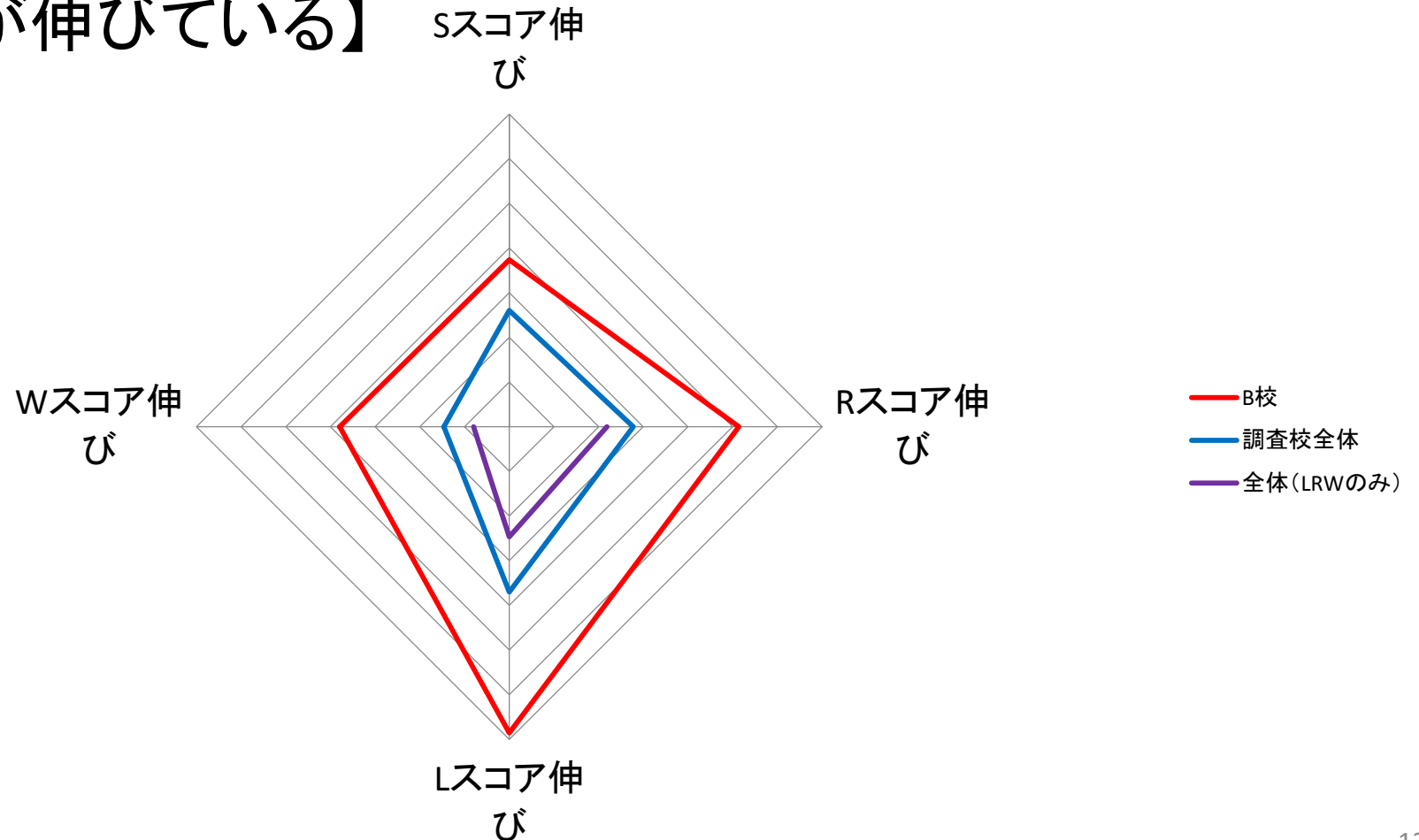
【RSWが伸びている】



結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

B校

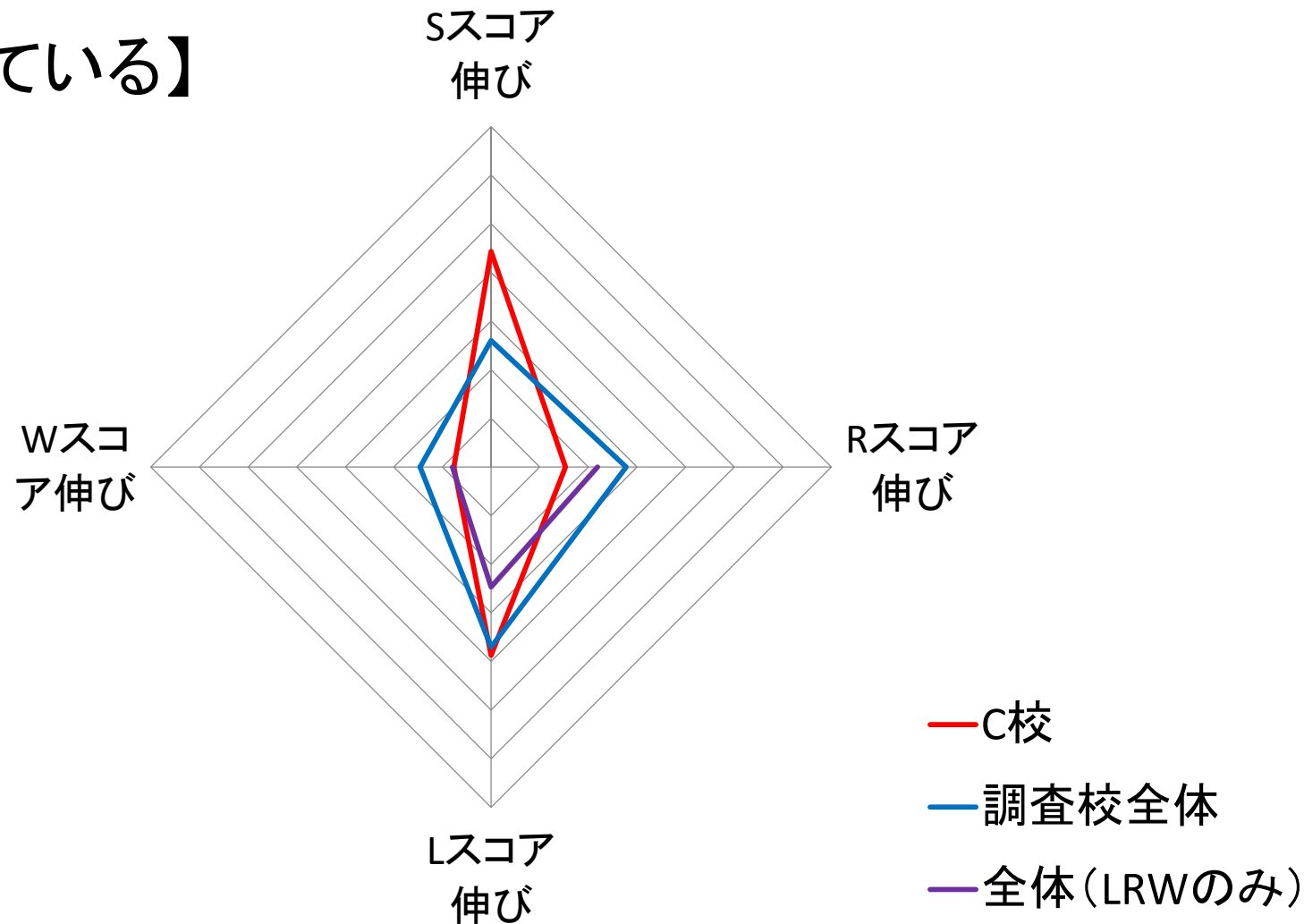
【4技能全てが伸びている】



結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

C校

【SLが伸びている】



インタビュー結果から

A校 【RSWが伸びている】

・私立、3年間の英語授業：21時間未満

●スピーキング活動

・英語に限らず、合科で、クリティカルシンキングにより論理的発信力をつけることを目指している (SGH)。

・テーマ (global issues) 設定された「リーディング」の授業内で実施。

・「読む」→「小さい活動」→「読む」→「小さい活動」→「読む」→「大きな活動」

・テーマに沿って、単元ごとプロジェクト型の大きな発信活動 (ディスカッション、ディベート、ネゴシエーション)。

・外国人教師の授業あり。

●他技能との関係

・R: テーマに沿ったauthenticな素材。発信のためのインプット。

・W: エッセイライティング (毎週提出)

・L: 適切なレベルとトピックの教材が不足しているために、他技能の活動にフィットしない。

インタビュー結果から

B校 【4技能全てが伸びている】

・公立、3年間の英語授業：21時間未満

●スピーキング活動

・コミュ英の授業内で継続的に実施。(3年前に県の指定校になり、共通理解が進む)

・**即興で話せる**ようになることを目指し、定着系の活動からステップを踏んで力をつけている。

・**表現や語彙を定着させる活動**(音読、キーワードリプロダクション)と**小さな発信活動**(スモールトーク、自分の意見を言う活動、先生とのQA)を行っている。

●他技能との関係

W: コミュ英で、話したことを書く。平日課題で読んだ長文について3文作文。

L: 話すことで、聞く機会が増えた。ペアワークや音読でも意味を考えて聞くことを重視。

R: 音読などの活動と合わせて、なぜそのような形(文法、表現)になるのか、理解した上で使えるようにしている。

インタビュー結果から

C校

【SLが伸びている】

・公立、3年間の英語授業：21時間未満

●スピーキング活動

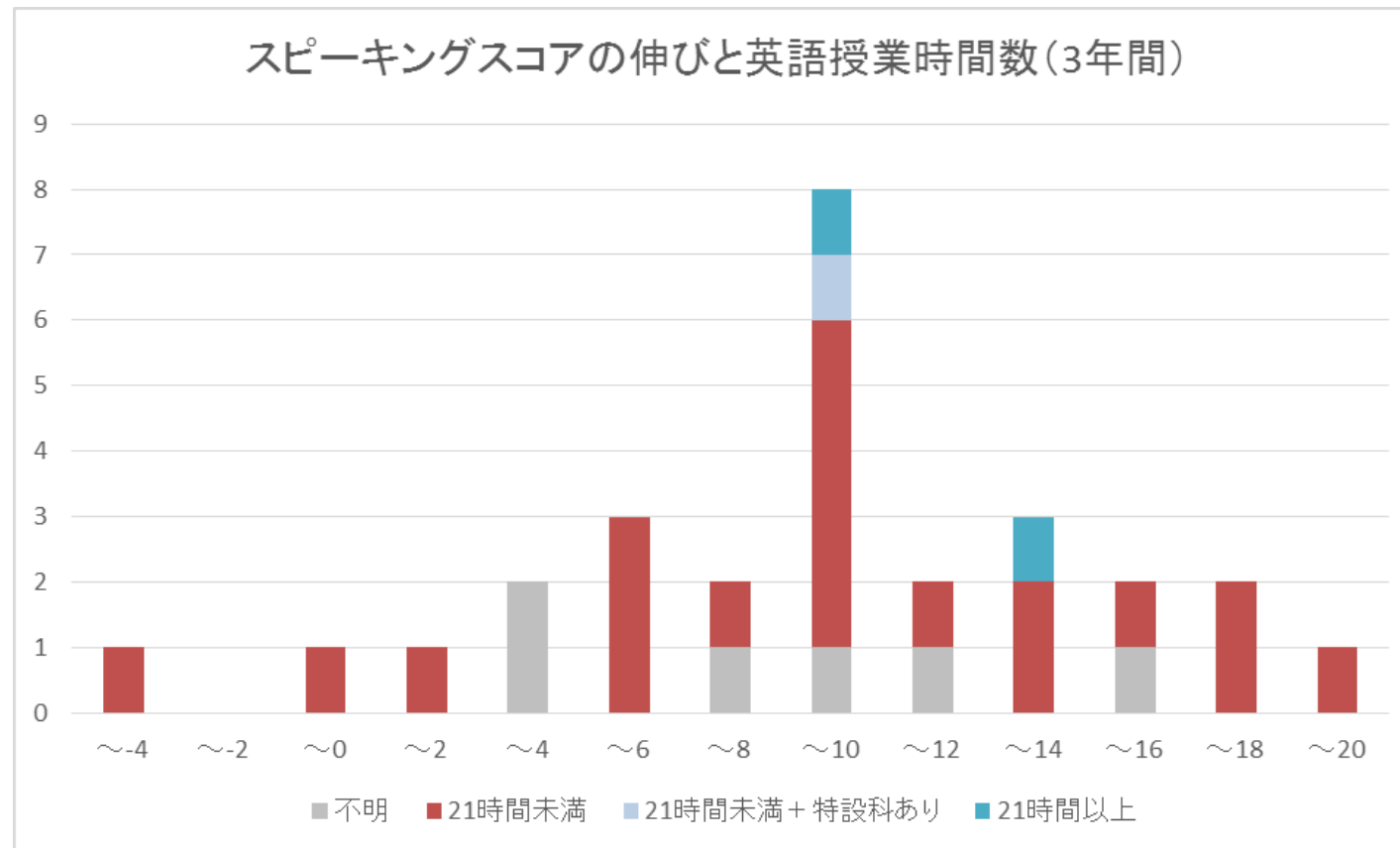
- ・コミュ英の授業内で実施。(3年前から県の指定校となる。授業での「アウトプット活動」を増→生徒に変化)
- ・CAN DO目標をもとに、単元での活動の内容、評価の方法を検討。
- ・高1のコミュ英では、Show & Tell やディスカッションなどの発信活動を実施。
- ・通常のコミュ英の授業では、音読、リテリングの活動、と小さな発信活動(先生とのQA、ペアワーク、自分の意見を言う活動)を行っている。

●他技能との関係

L: 話す活動が増えたことで、授業でのインプットの機会が増えた。聞き手を育てる指導。

スコアの伸びと授業時間数

- 授業時間数が多ければ、それだけスピーキング・テストのスコアの伸びるというわけではない。



結論

- スピーキング力の伸びには、学校間の格差がかなりある
- スピーキング力が伸びている学校でも、4技能の伸びのパターンは多様
 - RSW型
 - LRSW型
 - SL型
- スピーキング力を伸ばす要因は、英語授業の質
 - 授業時間が多い学校が、スピーキング力を伸ばしているわけではない
- スピーキング力を伸ばしている学校の特徴
 - (即興で)話させている
 - 継続的に話す活動を行っている
 - 「知識・技能の習得」のための訓練の量は、生徒のレベルによって異なっている
 - A1を脱すると「発信活動」に振れてくる

示唆

- 「知識・技能の習得」と「発信活動」
 - 「万能の」指導法よりは、「最適な」指導法
- テストが導く英語教育改革
 - エビデンスに基づくPDCAサイクル
- データ解釈の難しさ
 - データがあっても、信念を強化するだけのケースも